



昨年3月、桐生大橋右岸にあるコープぐんま本部の建物内に、地域住民の交流サロン「まちのえんがわ」がオープンした。毎週火・木・金曜、1食400円のおまかせランチと日替わり講座を楽しもうと、ご近所はもちろん、太田や館林といった遠方から足を運ぶ人もいる。そこに行けば暮らしが楽しくなる。居心地のよさを演出しているボランティアスタッフの代表、田面みよ子さん(64) 桐生市相生町二丁目は、来場者の表情が少しずつほぐれていく様子に、小さな手ごたえをつかんでいる。

7月5日の「まちのえんがわ」は盛況だった。来場者は48人とオープン以来最多。この日のおまかせランチのそばにつける天ぷらが、足りなくなると、予想以上でしたね」

「梅雨の中休みに加え、おそばは人気のメニュー。この日の講座『ピアノで歌おう』のファンもいるので、人が来るだろうと思って天ぷらは多めに揚げていたんですけど、予想以上でしたね」

他者とのかかわりが健康の源

まちのえんがわ代表 田面みよ子さんの場合

退職後につかんだ手ごたえ



ようやく軌道に乗りましたと語る田面さん。利用の問い合わせはまちのえんがわ(電070・2626・4696)まで。

「なにか動けなくて」。そんなとき、ボラ協から「まちのえんがわ」の代表を任された。「週3日ならできるかなど。働いていないと落ち着かなくて、貧乏性なんですよ」

「認知症の利用者が食事をしたたり、歌をうたったりする姿を、連れ合いの人がうれしそうに眺めている。そんな様子に喜びを感じるんです」

「目下の課題は移動手段の確保にあるとみる。『足のない人が多いので、来たくても来れないという声は聞いています』

「自分の意志で外出して、みんなで食事をして対話を築きむ。そこに健康のもとがある。」

さを感じる」という。

田面さんは10代から40年以上にわたり看護職に従事した。途中、ボランティア活動として手話を始め、手話サークル桐の葉会の会長を務めた。桐生市ボランティア協議会の監事も務め、新潟県中越地震や東日本大震災の際は被災地に赴き、炊き出しにも取り組んだ。

4年前に定年を迎え、これからは自分の好きなことをやろうと思っていたのに、ふたを開けてみると「仕事もないし、明日でいいかと思うとなかなか動けなくて」。そんなとき、ボラ協から「まちのえんがわ」の代表を任された。「週3日ならできるかなど。働いていないと落ち着かなくて、貧乏性なんですよ」

(毎週金曜掲載)